

学校だより 熱 砂

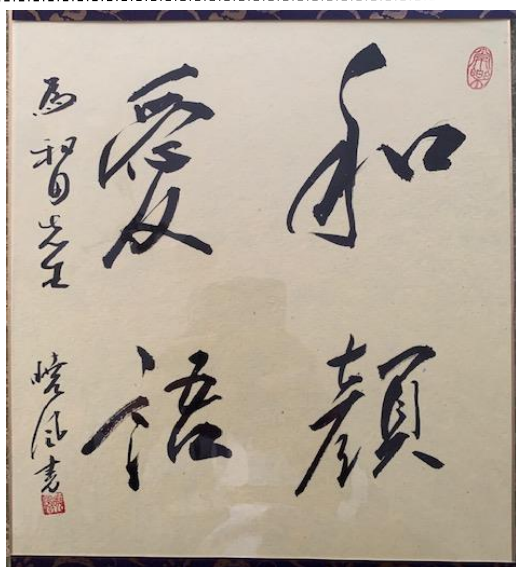
＜発行＞
令和元年 10 月 28 日
発行責任者：校長
和田 政男

アラビア語のマイサ先生退任、新しくヌール先生着任



12 年以上も日本人学校にご勤務いただきアラビア語の授業を担当していただいた Maysa Shams 先生が 10 月 23 日に退任いたしました。(写真左)

離任式での Maysa 先生のアラビア語での問いかけに、アラビア語で応える子どもたちの姿に、その教えの確かさを感じました。Maysa 先生の後任として、Nour 先生が、10 月 27 日に着任いたしました。(写真右)



「和顔愛語」

「わげん（わがん）あいご」と読みます。私の座右の銘としている言葉です。

もともと仏教のおしへのひとつで、「おだやかな笑顔と思いやりのある話し方で人に接すること」です。無財（むざい）の七施（ななせ）〔財がなくてもできる七通りの布施〕の中の和顔悦色施（わげんえつきせ）と言辞施（ごんじせ）に通じるとのことです。

20 代の頃の私は、生徒にとってけっこう怖い先生だったと思います。初任 2 校目の中学校で、T 先生という、今でも私が心の師と仰ぐ校長先生と出会いました。常に穏やかな表情で、ゆったりとした立ち居振る舞い、優しい言葉を発する先生でしたが、決して甘くはなく、「凜」とした姿勢を貫く先生でした。

T 先生は、その後も、私のような若輩者をも気にかけて下さり、私の昇進などの折りに、また定年退職してからまで声をかけて下さり、手紙で励まして下さるのでした。

若い教師だった私は、歳をとったとき、T 先生のような人間になりたいものだと思います。T 先生との出会いをきっかけに、「和顔愛語」という言葉を意識するようになったのでした。

もちろん、言葉どおり実践するのは難しく、自分がかつての T 先生の歳になっても心の師と仰ぐ先生の人格の、足元にも及びませんが、生徒の前に立つときばかりも実践しようと 30 年間心がけてきました。

先日、そのことを T 先生にお手紙でお伝えしたところ、書の大家である T 先生（号を暁風といいます）が写真の書を認めて送って下さいました。90 歳を越える方の書とは思えぬ気品と勢い、力強さとなめらかさを感じます。

60 歳を過ぎたとはいえ隠遁するにはまだ早いと感じる私は、この書を見て「もう一踏ん張りだな」と座右の銘への意識を新たにしているところです。

あなたがそこにいて、周りが何となく穏やかになる。

あなたというだけで気持ちが和み、何気ない言葉に勇気がわく。

そんな人間になれることを、生涯の目標にしてもよいかと。

さて、「和顔愛語」。職場でも、教室でも、家庭でも、地域社会でも、実践すべき言葉だと思いませんか？

ある日の学級通信から

学校では、全校に配布している学校だよりの他にも、学級担任が作成している学級通信が発行されています。校長はもちろんそれら全てに目を通すのですが、ときどき、「これは全校に聞かせたい話だな」とか「見本として示してあげたいな」と思える記事があります。そんなとき、学級担任さんから記事を拝借し、学校だよりで紹介したいと思っています。今回は G9 の学級通信からです。一斉読書後の生徒感想が掲載されておりましたが、その文章に感心いたしました。

300 字以内という小さなスペースの中に、この本の核心と自分の考えをズバリと表現し、少しも無駄がありません。驚くべき文章力です。

一斉読書、そしてその書評・感想を書く取り組み。素晴らしい取り組みであると思います。紹介させていただきました。

2019年10月20日（日）一斉読書

○書名

トットちゃんとトットちゃんたち 1997-2014

○著者

黒柳徹子

○出版社

講談社

○あらすじ（200字程度）

黒柳徹子さんがユニセフ親善大使になった1984年から30周年。

34万部のベストセラーとなった前作から18年、18カ国を訪問。飢餓、そして内戦。子どもたちを目を合わせて会話をしたトットちゃん（黒柳さん）の報告。

○児童生徒感想（下学年100字程度 上学年200字程度 中学生300字程度）1名

私がこの本で特異だと感じた点は、いたる所に被害者や死者数を明確に書いてあるところです。それでいて、子ども達が経験してきた凄絶な過去も書いてあるので「これだけの数の人がこんな思いをしているのか。」とイメージしやすかったです。

考えさせられた点は、最後に筆者が言っているように、小さい頃に親を亡くし人殺しをさせられた子ども達より、物質的に豊かで平和な環境で育つ場合が多い日本人の子どもの方が、自殺率が高いことです。

私が思うに、その違いは「実際に死に直面したことがあるか」です。日本は比較的治安がよく、殺害現場を目撃することや、殺害未遂の被害を受ける可能性はシエラレオネや南スーダンと比べれば低いでしょう。その反面この文章で取り上げられている子ども達は命からがらに何とか生き残った人達です。私自身含め、私達日本人は「生きること」という選択肢を戦わずして享受できるということがどれだけ恵まれているのか十分に理解していないと思います。

この子ども達の話を読むことによって、戦争の悲惨さに触れるとともに、「生きている」ということの素晴らしさを少しわかったと思います。